
特別寄稿

若葉の頃

藤井 照子*

京都女子大の門をくぐらなくなって早四年が経とうとしています。あの日陰の殆どない、通称女坂を一体何往復したことでしょう。高校までは公立の共学に通っていた私にとって、女の子ばかり、という環境はひどく新鮮かつ不思議でした。そして、それは上回生に進むにつれ当たり前と化していったのですが…。

大学時代の思い出を語る上でのキーワードはいくつか挙げられます。大きく分けると「女子大」「栄養士」「研究室」の3つです。最後の研究室、これがとても印象的でした。もともと、大学の学部内でも食物栄養学科はカリキュラムが詰まっており、他科の学生らに比べると忙しい部類に入っていたと思います。学生の本分は学ぶことであり、その為に存分に時間と場所を与えられているのですから贅沢と言えば贅沢なことです。大学=自由という間違った風潮が見え隠れする昨今で、「忙しそうね、大変ね」と他科の友人から同情される事もしばしばありました。確かに「バイトの時間がない」「サークルに行けない」「レポートが」「単位が…」と嘆いた事は数知れず。しかし、そんな講義の忙しさもたいした事ではなかったと思わせるのが研究室の存在でした。

卒業研究を必須とする食物栄養学科の学生は3回生の終わりから卒業までの約1年間の間に数ある研究室のひとつに配属され、卒業前の研究発表に向けて日々努力するのですが私が所属したのは田口弘康教授の率いる「田口研究室」でした。ここはC館2階の突き当たり、右奥にあり、目の前はLL教室でどちらかといえば人の往来の少ない場所に位置していました。当学科の研究室は殆どがB館内にあり、離れ小島にきたような、そんな気分になることも初めはありました。

田口先生とは、2回生の時に受講した一般教養の化学で初めて出会いました。先生は非常に面白い授業を展開されていた記憶があります。講義を受けていた時は「このような授業を中学や高校で受けられればもっと興味を持つ子が増えるだろうな」と思ったものです。

講義における先生と、研究室における先生の顔は違

います。講義では面白くやさしいイメージです。しかし研究室においては、やはり「研究者」の眼差しがするどく、実験ひとつひとつに妥協はゆるさず、厳しい。化学実験の技量をほとんど持たず、受験化学レベルの知識の私達に、先生は本当に忍耐強く教授して下さったと思います。きっと「じれったいなあ、何でわからないかなあ」と思われた事も度々あったはず…。とはいえ、研究室でいつも厳しい顔ばかりしておられるわけではありません。実験や研究内容に関する事以外では講義同様に面白くやさしい先生です。また色んな経験をつまれている、とても興味深い話をお食事に出かけた時や、休憩の時などにたくさんしてくださいました。

田口先生はコーヒーや紅茶をよく飲まれます。それらのストックがなくなると、「買い物に行こう!」と中書島のあたりにある業務用スーパーまで連れて行ってくださいました。コーヒーと言えば、先生には二つの習慣があります。ひとつは新品のインスタントコーヒーを開ける時。瓶の中蓋を、瓶の淵に紙くずがひとつも残らないようにカッターナイフを使って器用に外すのです。周りに紙くずが残っていると、キャップがしっかり閉まらず、湿気がきってしまう原因になるとか。ここまできっちり外される方は実は初めてだったので非常に驚きました。もうひとつはコーヒーにミルクなどを入れてかき混ぜた後。スプーンに残った一滴をコーヒーの表面にそ〜っと近づけ、吸い込ませるという小技を披露されるのです。こんな日常的なささいな事象でさえ、「これはね…」と科学的根拠と共に説明して下さったのを覚えています。今となってはこれら二つの習慣は私にもついてしまい、今では友人とコーヒーなどを飲む時には同じように披露して楽しんでいるのです。

季節の良いころには、実験の空き時間を見つけては梅を見に行ったり、紅葉を見にドライブしたりと研究室から連れ出してくださいました。実験が思うように進まず、煮詰まってしまった私達に、気分転換をさせようという先生のご配慮だったと思います。

色々ここまで書き連ねてきましたが先生から学んだ事は研究や実験の技法だけではなく、先生のもの

*医療法人財団康生会武田病院栄養科管理栄養士

の考え方や授業の進め方，人への伝え方，更には様々な豆知識に至るまで1年間の研究室生活を共に過ごして経たことは数多くありました。それらは現在の私の病院栄養士としての仕事にも生きており，本当に感謝すべき1

年間だったと感じています。ありがとうございました。

最後になりましたが，先生のこれからの更なるご健勝とご活躍をお祈りしております。